

【史料紹介】

長崎市外海町開遺跡出土の鉄製武器

古門 雅高

はじめに

ここに紹介する長崎市外海町黒崎の開遺跡出土の鉄製武器は、以前からその存在は知られていたものの¹、実測図や写真が未公開であつたため、具体的な検討や歴史的評価がなされないまま今日に至っている。

西海考古同人会は二〇二三（令和五）年一〇月に長崎市外海歴史民俗資料館を訪れ、展示されていたこれらの鉄製武器を実見するとともに、遺構から出土した刀剣としては長崎県本土部で最多の量であることを確認した。さらに実測図などの作成・公開の必要があるとの判断から翌年四月には再び同館を訪れ実測を行い、五月には写真撮影を行った。その間、実測図や写真の公開に関して長崎市文化観光部文化財課にご相談し、本誌での史料紹介に至った。なお、本稿に掲載した実測図は筆者が作成し、写真撮影は渡邊康行が行った。

一 発見の経緯

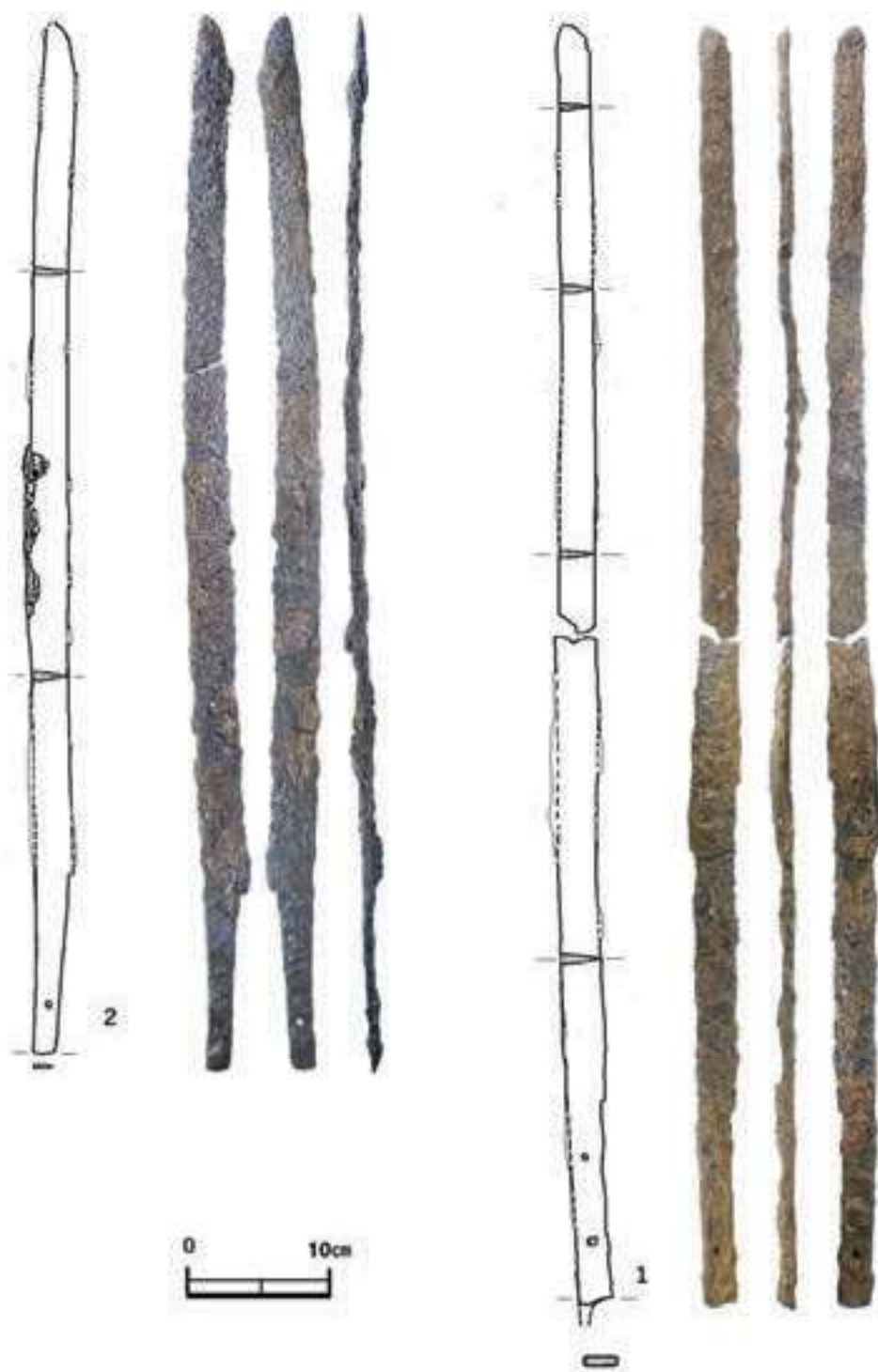
開遺跡の発見の経緯を記した長崎市外海町の宮田古墳群の発掘調査報告書には「当時、黒崎地区の開において荒地の開墾をしていた村川昭夫氏が発見した石棺の調査を町教育委員会が実施していた」との記述がある。当時とは昭和五八（一九八三）年一月のことであ

る。さらに同書の「周辺の遺跡」の項では「古墳時代の遺跡は黒崎の開遺跡があり、石棺墓で棺内から県内初の石枕が出土した。その他には鉄刀二振、鉄剣一振、刀子一本、鉄鏃五本が出土した。遺跡は標高一五mにあり、前面に低湿地が広がる南向きの斜面に位置している」と記載されている。その他に鉄製武器と共に棺内に遺された石枕の実測図、さらに石枕の写真、遺跡の遠景、鉄製武器出土石棺の写真が掲載されている（外海町教育委員会編一九八五）。

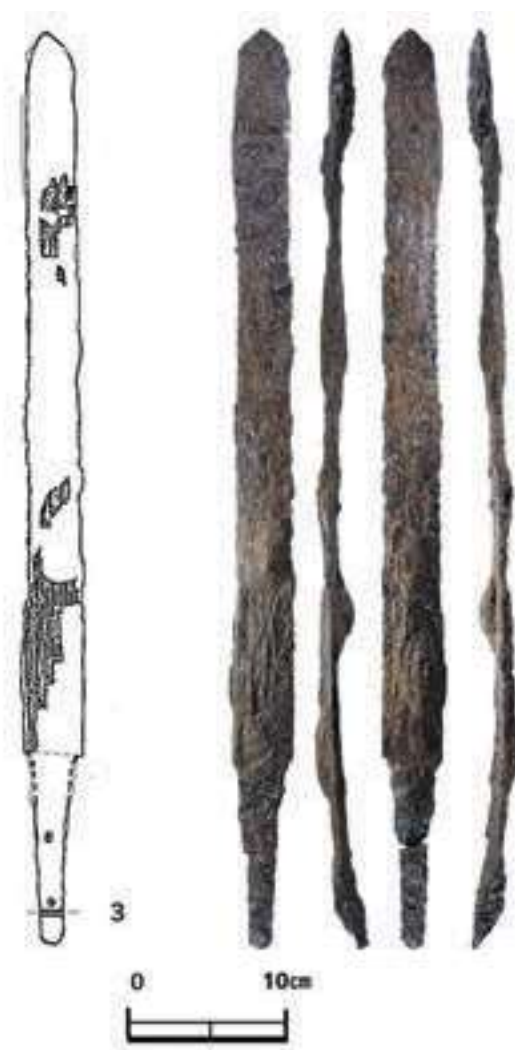
第一図 開遺跡位置図



第二図 開遺跡出土の鉄刀（縮尺五分の一）



第三図 開遺跡出土の鉄剣（縮尺五分の一）



五 cm、関部から一〇 cm の部分で〇・六 cm である。茎部は、もともと隅抉^{すみえくりじり}死であったのが欠損している可能性がある。見かけの茎尻での茎部の長さは約一四 cm、幅は二・四 cm である。茎部の厚さは見かけの茎尻で〇・六 cm である。木質は残存していないが、棟側のサビふくれの状況から、元々二枚合わせの鞘が装着されていた可能性がある。目釘穴が二か所に穿たれている。

② 鉄刀（第二図 2）

現存全長七四 cm である。刃部の長さは六一 cm、幅は関部で二・七 cm、中央で三 cm、鋒より一八 cm の部分で三 cm である。刃部の厚さは鋒から一八 cm のところで〇・五五 cm を測る。茎部は長さ二・五 cm、同幅は関部で二・六 cm、茎尻で一・五 cm を測る。茎部の厚さは茎尻で〇・三 cm である。

茎部の厚みが刃部よりも薄く、断面形状も三角形を呈することから、最初の茎が折れて新たに茎を作り直したことも考えられる。また、刃部の中位より茎側には、研ぎ減りが見られる。鞘は棟側に別材が入るようで、二枚合わせではない可能性がある。鋒は欠けている。刀身は内反り気味で、茎は外反りである。目釘穴は一か所である。

二 鉄製武器の概要

出土した鉄製武器はすべて発掘調査後、当時の外海町教育委員会から元興寺文化財研究所に依頼し、保存処理されている。

(一) 鉄刀

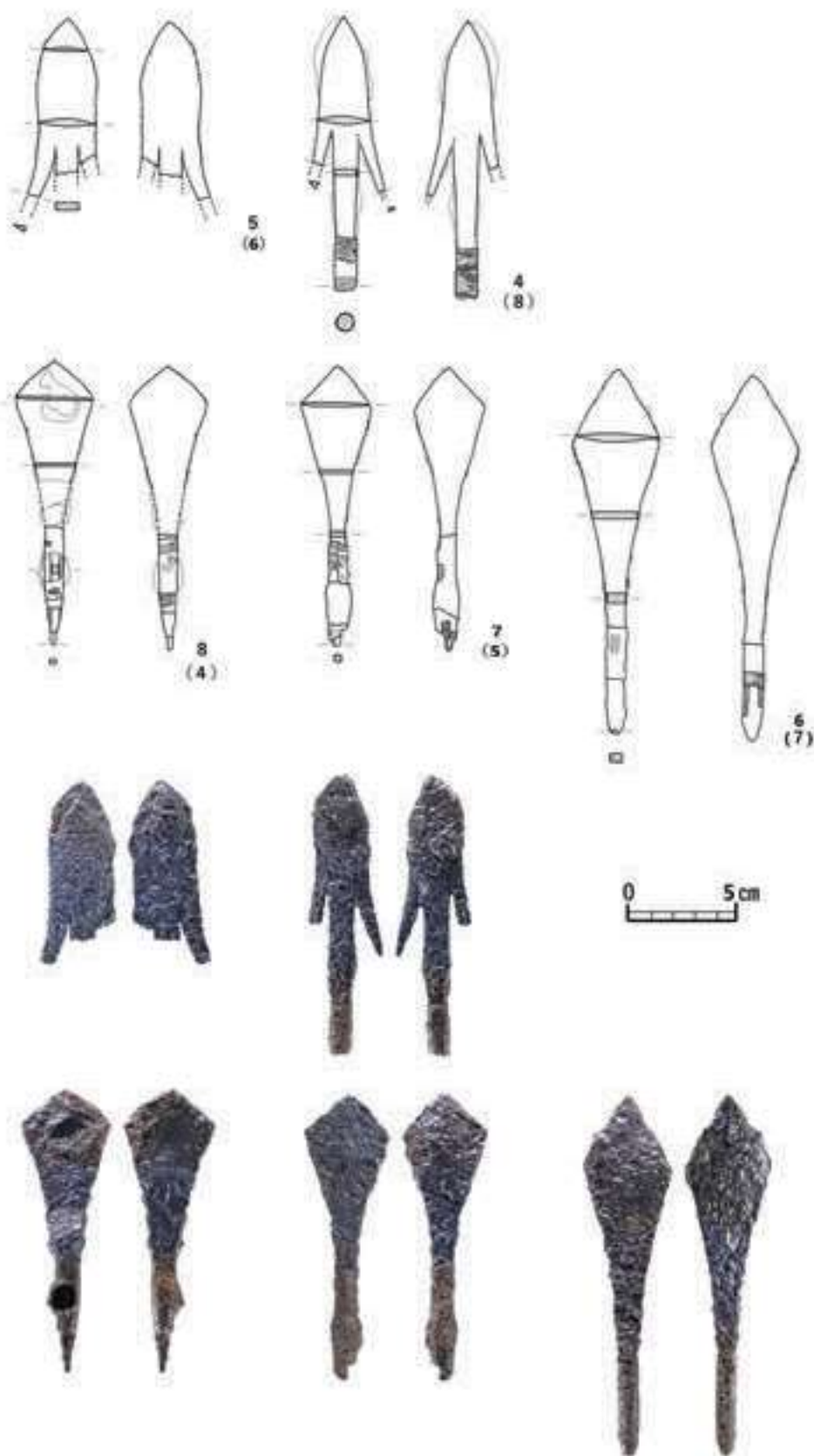
① 鉄刀（第二図 1）

刀身が折れている。現存全長四三・六 cm と四七・六 cm。刃部の長さは約七六 cm、幅は関部二・八 cm、中央三 cm、鋒より六 cm の部分で二・四 cm である。刃部の厚さは鋒から六 cm の部分で〇・五 cm、中央で〇・

(二) 鉄剣（第三図）

現存全長五八・五 cm の長剣である。鞘が残存している。刃部の長さ四六・一 cm、同幅は関部三・八 cm、中央三・一 cm、鋒より二 cm の部

第四図 鉄鏃（縮尺三分の一）括弧の中の数字は展示番号



分で一・五cmである。茎部の厚さは茎尻より二cmの部分で〇・四cmを測る。茎部には木質痕跡が無いため、鞘を残し、把を外して副葬した可能性がある。中細茎で関は浅く、浅直・斜角関である。関の位置が鞘のラインと一緒に揃っている。目釘穴は二か所に穿たれている。

(三) 鉄鏃

① 鉄鏃 (第四図4 (8))

柳葉形の有頸有茎鏃である。現存全長一三・二cm、幅三・四cm、重さ二八・二gである。鏃身断面は両丸造、腸袂部断面は平片刃造である。矢柄の木質の上に桜樹皮が残存するが、樹皮の一部は矢柄の範囲を越え、鉄本体にも直接巻かれている。

② 鉄鏃 (第四図5 (6))

柳葉形の有頸有茎鏃である。腸袂のくり込みが深い。現存全長八・四cm、幅二・八cm、重さ一四・二gである。鏃身断面は両丸造、腸袂部断面は平片刃造である。

③ 鉄鏃 (第四図6 (7))

圭頭形の無頸有茎鏃である。長さ一七・五cm、幅四・二cm、重さ四三・六gである。鏃身断面は両丸造、茎は長茎で、同断面は方形である。腸袂柳葉鏃 (鉄鏃 (第四図4)) と異なり、茎の鉄本体に直接樹皮を巻いた部分がなく、矢柄と樹皮巻の範囲は揃うようである。

④ 鉄鏃 (第四図7 (5))

圭頭形の無頸有茎鏃である。長さ一三・五cm、幅三・四cm、重さ二三・一gである。鏃身断面は両丸造、関部はナデ関、茎部は長茎で、断面は方形である。③鉄鏃と同様に、矢柄と樹皮巻の範囲は揃う。サビふくれによって生じた空隙から、鉄本体、矢柄、樹皮の三層構造が明瞭に観察できる。

⑤ 鉄鏃 (第四図8 (4))

圭頭形の無頸有茎鏃である。長さ一三・六cm、幅三・七cm、重さ二三・一gである。鏃身断面は両丸造、茎部は長茎で、同断面は方形である。先の鉄鏃 (第四図7) と同様に、矢柄と鏃身の境が明瞭で、鉄本体の上に矢柄の木質が乗り、さらに上に桜樹皮を巻く三層からなる部分が続く。したがって鉄本体 (茎) を矢柄に差し込んだ後に、桜樹皮を巻いて固定していることが分かる。

⑥ 鉄鏃茎部分

展示では刀子とされているが、鉄鏃 (第四図5) と同一個体の可能性がある。

以上の鉄製武器の時代は、隅袂尻直茎の鉄刀 (第二図1) や浅直・斜角関中細茎の長剣 (第三図3) の存在から池淵編年の古墳時代中期前半 (池淵一九九三)、鉄鏃の組み合わせから水野編年の中期一から同二 (水野二〇一三)、松本編年の七期 (松本二〇〇七) あたりに該当すると思われる、総じて古墳時代中期前半頃のものと考えられる。

三 おわりに

開遺跡の鉄製武器が注目されるのは、前述したように刀剣が長崎県本土部では最多の出土量を誇るからである。それに対し、遺跡が立地する場所は可耕地が乏しく、同時代の遺跡としては隣接する宮田古墳群のみの少なさであり、その前後の時代も顕著な遺跡は存在しない。筆者は当時貴重であった鉄製武器の多量副葬が当地の歴史的地理的環境と整合しないことに違和感を覚える。

しかし近年、西彼半島の西岸は、四世紀後半から五世紀に行われた倭王権の朝鮮半島への軍事進出に伴う航海ルートであったという学説が提起されている³⁾。この学説に従った場合、開遺跡の鉄製武器群はどのような歴史的価値づけと評価ができるのか大変興味深く、今後の研究の進展に期待したい。

本稿を執筆するにあたり、片山巳貴子、竹田ゆかり、立谷聡明、中村和正、野澤哲朗、宮崎貴夫、森内敏和、渡邊康行の各氏にはお世話になった。芳名を記し感謝したい。

さらに遺物実測や写真撮影にあたり長崎市文化観光部文化財課の宮下雅史、竹村南洋の両氏には多くのご支援を賜った。末筆ながらお礼申し上げる。

(西海考古同人会会員)

【引用・参考文献】

池淵俊一 一九九三

宇野慎敏 二〇一三

扇崎由 二〇一四

外海町教育委員会編

松木武彦 二〇〇七

水野敏典 二〇一三

「鉄製武器に関する一考察―古墳時代前半

期の刀剣類を中心として―」『古代文化研究』第一号 島根県古代文化センター

「九州島における四・五世紀の一樣相―肥前(一)」「ぐさ」三〇五号 豊中歴史同好会

<http://toyoreki.way-nifty.com/blog/2013/07/68-59b1.html>

「考古学基礎講座―古墳時代の鉄鏃―」岡山市埋蔵文化財センター定期講座資料

<https://www.city.okayama.jp/kurashi/cmsfiles/contents/0000005/5318/000192260.pdf>

一九八五『長崎県西彼杵郡外海町所在 宮

田古墳群』遺跡範囲確認調査 外海町文化財調査報告書第三集 外海町教育委員会

『日本列島の戦争と初期国家形成』東京大学出版会

「⑤鉄鏃」『古墳時代の考古学四 副葬品の形成と編年』同成社

注

¹ 発見の顛末は宮田古墳群の発掘調査報告書の中で触れられている
(外海町教委編一九八五)。

² 長崎市外海歴史民俗資料館の中村和正氏よりご教示。

³ 西九州沿岸の外洋航海ルートを考古学資料を用いて最初に提唱したのは宇野愼敏氏である(宇野二〇一三)。